

うるち玄米 1 等級比率 90% 達成に向けて ハウス管理・田植え・初期管理のポイント！

ここがポイント！！

- 1 徒長苗にしない（ハウスの温度管理に注意）
- 2 移植前追肥を施用し、田植えは適期の好天日に実施
- 3 除草剤は遅れずに散布

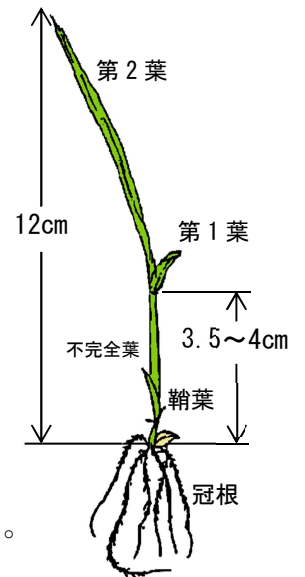
1 温度管理の徹底で健苗育成

(1) 育苗期間の温度管理

育苗段階	終了段階の生育めやす	温度管理		処理日数
		昼間	夜間	
出芽期(無加温)	出芽長 0.5~1cm	30℃	10℃以上	5~7 日
緑化期	第 1 葉鞘長 3.5cm	20~25℃	15~18℃	3 日程度
硬化期	苗丈 12cm、葉数 2.0 葉	15~20℃	10℃以上	12~14 日

(2) 育苗後半(硬化期)の管理

- 日中はハウスを全開にして十分外気に慣らす。(徒長苗防止)
- 田植えの 1 週間前からは、夜間もハウスを開き外気に慣らす。(ただし低温・降霜時はハウスを閉じる)
- かん水は 1 日 1 回午前中に行い、硬化期後半は 1 日 1~2 回行う。(夕方は床土の温度を低下させるのでかん水しない)
- プール育苗では、緑化終了後に湛水を開始し、湛水後は原則として昼夜ともにハウスを開放する。(ただし低温・降霜時はハウスを閉じる)



2 移植前追肥の活用

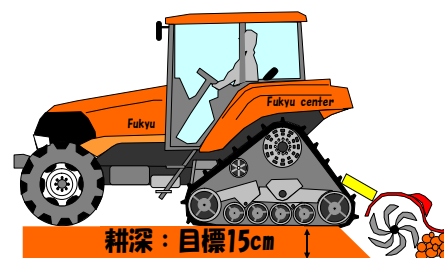
- 苗の老化防止と田植え後の活着促進ため、移植前追肥を施用する。(ただし軟弱苗や徒長苗には施用しない)
- 田植 4~5 日前に窒素成分で 1 箱当たり 1~2 g 施用する。

3 適正な基肥施用

- 基肥+穂肥の分施肥体系での基肥窒素量は、過剰生育を抑え 1 回目の穂肥がしっかり施用できる稲姿になるように調節する。
 - 基肥一発肥料で、前年に倒伏したり過剰生育だった場合は減肥する。
 - 基肥を施用した後、肥料成分の流亡を防ぐため 1 週間以内に耕うん・入水する。
- ※気象災害軽減のため、土壌改良資材や土づくり資材を積極的に活用する。

4 耕うんの深さは「15 cm」を目標

- 根の分布を広げるため、耕深は 15cm を目標とする。
(ただし一気に深くせず今より 1~2cm 深くする)
- ワキの発生抑制、耕深の安定化のため、耕うんは可能な限りほ場が乾いてから低速で行う。



5 適期田植えの実施（早植え注意！）

- 早植えは出穂期が早まり、高温条件下での登熟によって乳心白粒等が発生しやすくなり、品質低下の危険が高まる。
- また早植えは生育過剰になりやすく、細茎化による倒伏や籾数過多で米粒の充実不足になりやすい。

6 栽植密度・植え込み本数・植え付け深さ

- 栽植密度は、

{	茎数が過剰になりやすいほ場は坪当たり 50 株
	早生品種や茎数が確保しにくいほ場は坪当たり 60~70 株
- 植え込み本数は、1 株当たり 3~4 本
- 植え付け深さは、2~3 cm

7 田植後の水管理

- 活着するまでは 3~4 cm のやや深水の管理(低温や強風による植え傷み防止)
- 活着後は 2~3 cm の浅水管理で水温の上昇を図り、分げつの発生を促進する。
- ワキの発生が多い場合は夜間落水(2~3 回繰り返す)でガス抜きを行う。
- 藻や表層剥離の発生に注意し、早めの水の入れ替えや夜間落水、または対象薬剤で対応する。(気温が高く、雨が少ない年は特に注意)

8 除草剤の効果を最大限に発揮

- 丁寧な畦塗りや代かきで漏水を防止し、田面を均平にしておく。
- 初・中期一発処理剤の使用を基本とし、早めの散布を心がけ散布適期を逃さない。
《参考》初期剤を使用する場合は移植前処理を避け、移植時または移植後に使用する。
- 散布時の水深は 3~5 cm 程度を確保する。(ジャンボ剤・豆つぶ剤は 5~7 cm)
- 処理後 7 日間は給水せず止め水とし、4~5 日間は湛水状態を保つ。(落水や掛け流しは厳禁)

9 新之助研究会の方へ ~新之助栽培のポイント~

- 田植えは、5月中旬に行う。
- 今年から作付けるほ場は、漏生籾由来の異品種混入防止対策として、除草剤は体系処理とし、生育期間中は条間や株間の稲株を抜き取る。
- 葉いもち防除(箱施用または水面施用)を必ず実施する。

農薬の使用に当たっては、製品のラベルに記載されている使用基準や注意事項、使用方法をよく読み、内容を遵守して使用しましょう。